

小島の海岸



2006年10月28日、29日、NPO法人表浜ネットワーク主催による第2回表浜エクスカーションが開催されました。ナビゲーターは、東京大学の清野先生、豊橋技術科学大学の青木先生で、現場を巡検しながらリアルな海岸事情をご指導いただきました。

まず、小島の海岸を歩きました。ここは、ウミガメの産卵地として有名な海岸です。ウミガメの上陸の障害となっていた消波ブロックを地元の要望で撤去することができました。撤去後は、現状維持の状態のようです。

簡易粗朶(小島の海岸)



小島海岸では、表浜ネットワークが中心となって、地元の子供たちと一緒に、簡易粗朶の設置に取り組んでいます。これは、2時間程度で設置した手製の粗朶です。このような簡易なものでも、風を遮断して砂を溜める養浜機能を立派に果たします。こういった小さな取り組みの積み重ねが、美しい砂浜の保全に大切なことです。

ハマボウフウ(小島の海岸)



ハマボウフウ。刺身のつまやフライにして美味しく食べられます。関東では、食用に乱獲され、貴重な海浜植物となっています。

このような植生があるところは砂が溜まりやすく、養浜効果があるようです。しかし、植生が繁茂している場所は、見かけ上駐車場の候補地となりやすく、その機能は理解されていません。砂浜の保全には、植生のあるところも含めて浜としてとらえ、一体的に考えるべきです。

ウミガメのタマゴ(小島の海岸)



ウミガメのタマゴ(死骸)です。触るとまるでピンポン玉のように弾力がありました。

小島海岸では、今年5箇所産卵が確認されましたが、小動物(ハクビシン)にやられたようです。ウミガメは汀線から60～100mの範囲で産卵を行い、50～60cmの穴を掘るそうです。植生のあるところまで上陸して、産卵するウミガメもいるだとか。

管理道路(小島の海岸)



日本の海岸では、管理道路が海岸線と平行に整備されているのが見受けられます。海へのアクセスは快適ですが、道路により植生の連続性を遮断する恐れがあるようです。小島海岸では、外からもってきた土で整備したことや自動車の進入により、外来種の進入が問題視されています。海浜植物の保全には、欧米のように、海岸線と垂直方向のアクセス路とする工夫が望まれます。

久美原の海岸



久美原の海岸です。表浜の独自の風景である海食崖と前浜の変化と丘陵の照葉儒樹林が眺望できる絶景ポイントです。

底質や温度、水の濁りの差により、海面がうろこ模様に見えました。

赤羽根ロングビーチ



漁港東岸の赤羽根ロングビーチです。漁港から3kmの範囲で、砂浜が存在している海岸はここだけとのこと。

ここは、ウミガメ上陸地であり、産卵を妨げないように、6～10月中は水銀灯を灯火していません。また、世界大会が開催されたサーフィンのメッカでもあります。

この海岸では、漂着物や貝が目につきます。微妙な物理力の違いで砂州が形成されており、漂着物が打ち上げられやすい地域とのこと。今年から外国からの漂着物調査(主に韓国、中国からの漂着)も実施されています。鯨、タイマイ等の大型生物も座礁するようです。

また、ここで見られる赤い石(レッドチャート)は古い年代の鉱物で、日本列島の中央構造線に分布しているものです。つまり、この海岸は、天竜川上流から流れ着いた山地部の鉱物も多く流れ着く地域でもあります。

赤羽根漁港



赤羽根漁港です。技術的に困難とされる砂浜の上に港を建設することに成功した例です。その反面、漁港の突堤が、天竜川から供給される砂の西への移動を止めているとの問題もあります。漁港への航路の確保のため、防波堤、突堤が建設されましたが、当時は海水浴場計画もあったようです。

若見の海岸



漁港西岸の若見の海岸です。砂浜が後退しているため、離岸堤を設置しました。しかし、離岸堤は現状維持にとどまり、根本的な土砂供給不足の解決にはなりません。侵食箇所の移動に対して、次々と離岸堤を設置しなければならないという悪循環とならざるを得ません。

砂浜が衰退する主な3つの原因は、川からの土砂供給の減少、がけ崩れ対策 構造物(突堤)による土砂移動の遮断、と言われていています。海岸保全は種々の問題との兼ね合いであり、解決がとても困難です。